ネストリオスのアレクサンドレイアのキュリロスへの第二の手紙

(1)貴殿(キュリロス)の手紙には驚嘆に値する教えの言葉が収められている

「聖にして偉大な(ニカイアの)教会会議は、その本性(フュシス)に即して、父であられる神から生まれた独り子であられる子、真の神からの真の神、光からの光であられる方、この方を通して父がすべてのものを造られた方ご自身が、降って来られ、肉となられ、人間となられ、苦しまれ、復活された」と言われる

(2)これは狭下もご自分の言葉とお認めになるでしょう。しかし、私どもの勧告にも耳を傾けてほしい

それはパウロがテモテに勧めた言葉である。「朗読と勧めと教えに専念しなさい。そうすれば、あなたは自分自身と、あなたを聞く人々とを救うことになります」

「専念しなさい」とは、それらの聖なる伝承を表面的に読むなら、貴殿は赦しを求めるに値する無知に陥ることになるし、ということである

貴殿は、父とともに永遠の方である言(ロゴス)が苦しみうる方であると彼らは主張したと、考えられたのである

もっと細心の注意を払って、彼らの言葉を検討してみれば、この教父たちの合唱隊は、同一本質のものである神性が苦しみうるものであるとも、父とともに永遠のものである神性がごく最近になって生まれたとも、壊滅された神殿を復興したとも主張していないことがわかるであろう

(3)(教父たちは)次のように言っている「私はまた、私たちの主イエス・キリスト、独り子なる子を信じる」。彼らがどのようにして、まず初めに、神性と人間性に共通する「主」、「イエス・キリスト」、「独り子」、「子」といった基本的な名称を提示し、そのうえで受肉、復活、受難に関する伝承を打ち立てているかに注目してほしい

それは、まず初めに、双方の本性(フュシス)に共通することを表示する名称を提示することで、子であることと主であることに関わる事柄が切り離されることのないよう、また本性に関わることが子の身分の単一性の内に混同されて消滅してしまう危険性を避けようとしたのである

この点に関して彼らの教師となったのはパウロである。受肉と受難について言及するにあたって、まず初めに双方の本性に共通する「キリスト」という名前を掲げ、そのうえで、本性のそれぞれに関わる事柄を言い添えている

「あなたがたのあいだでこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにも見られることです。キリストは神の姿形でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず」―「死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順なものとなられました」

(4)実に、死について言及しようとするときには、それによって神である言(ロゴス)が苦しみうるものであるとは思われないように、単一のプロソーポンにおける苦しみうる本質(ウーシア)と苦しみえない本質を表示するものとして「キリスト」という名称を掲げているのである

プロソーポン：πρόσωπονはラテン語のペルソナ：personaに対応するが、ここにおけるプロソーポンは「ヒュポスタシスの表れ」、「具体的な存在の外的な表れ」を意味する(本文の注)

新カトリック大事典によれば、ペルソナはヒュポスタシス(位格)のラテン語訳として使われたとも言われるが、カルケドン公会議宣言のキリスト論の用語としては、「神性・人性を統一する唯一のプロソーポン、唯一のヒュポスタシス」とされたとある。

一方、キリスト教神学事典(教文館)によれば、「プロソーポンはヒュポスタシスを言い換えた概念であって、…アレクサンドレイアではほとんど用いられなかったために、東方の神学用語とはならかった。この語は用語上の混乱を引き起こしたが、アレクサンドレイア会議(362)によって解決された。この語がラテン語のpersonaの訳語として用いられた背後にはサベリウス主義の影響があると考えられる。この語はアンティオケイア学派の神学者たち(特にネストリオス)によってキリスト論に用いられた。キリロスがヒュポスタシスを用いてキリストの人格を説こうとするのに対して、彼らはプロソーポンの方がキリストの人格の統一性についてより満足すべき理論を構築できると考えた」とある

それは、何の危惧もなしに、キリストは苦しみうるものであり、かつ苦しみえないものであると称することができるからである

つまり神性によって苦しみえないものであり、肉体の本性(フュシス)によって苦しみうるものだからである

(5)この点に関して、私は多くのことを語ることができるし、まず第一に彼ら聖なる教父たちは救いの営み(オイコノミア)にもとづく誕生について言及しているのでなく、受肉について言及しているとを指摘できるが

貴殿が指摘された第二の点に進むことにする

(6)そこでの、人間性と神性という概念にもとづく本性の区別と、一つのプロソーポンにおける両者の結合、そしてまた、神なる言(ロゴス)は女からの第二の誕生を必要としたとは言えないこと、神性が苦しみに服することはないという宣言に私は賛同する

しかし、その他の点は聴衆の耳には理解しがたいものであり、私にとっては、先に述べられたことを覆すものと思われる

実に、初めの個所で苦しみえないと宣言された方、第二の誕生を受け入れることはないと宣言された方が、ここでは、苦しみうるもの、ごく最近造られたものとして提示され

その結果、本性に即して神なる言に固有な事柄が、神殿との結合によって壊滅されてしまっているし、あるいは神的な本性と分かちえない、何の罪もない神殿が罪人たちのために誕生と死を甘受したことが、人々にとって大して意味がないかのようにみなされているし

あるいは「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と言われたのであって、「私の神性を壊してみよ。三日で建て直してみせる」と言われたのではないし、「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。彼の母マリアはヨセフと婚約していたが、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」

(7)聖書のあらゆる個所で、主の救いの営み(オイコノミア)に言及されるときには、私どものための誕生と受難はキリストの神性ではなく人間性に帰されているのである。その結果、聖なる処女は「神の母(テオトコス)」ではなく、「キリストの母(クリストコス)」と呼ばれなければならない

次のように証言する言葉に注目してほしい、「ヤコブはマリアの夫ヨセフを儲けた。このマリアからキリストと呼ばれるイエスがお生まれになった」、「イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。彼の母マリアはヨセフと婚約していたが、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった」

「イエスの母がそこにいた」という言葉については何と言うべきだろうか。次のようにも言われているのである「イエスの母マリアとともに」

他の無数の言葉が、子の神性は最近のものではなく、肉体的な受難に服したのでもなく、神性の本性と一つに結ばれた肉が(最近のものであり、受難に服したことを)人類に証言している

肉が神性と一つに結ばれたことから、キリストはダビデの主そのものダビデの子と呼ばれるのである

『「あなたたちはキリストのことをどう思うか、誰の子だろうか」、彼らが『ダビデの子です』と言うと、イエスは言われた、『ではどうしてダビデは、霊を受けて、主と呼んでいるのだろうか。(主は私の主にお告げになった。私の右の座に着きなさい)』と」と述べられている

肉に即して絶対にダビデの子であり、神性に即して主であられるのである

それゆえ、肉体は子の神性の神殿、神的な結合に即して一つにされた神殿であり、その結果、神的な本性が『神殿の本性』をご自分のものとされたと表明することは、福音の伝承に適う、正しいものである

しかしながら、兄弟よ、この取得をる名目にして、結合された肉に固有な事柄、すなわち誕生、受難、死といったことをも神性に帰すことは、異教徒の誤謬、あるいはアポリナリオスやアレイオス や他の異端者たちによって欺かれることにほかならない

(8)以上は聖なる教父たちの伝承であり、聖書の教えていることである

しかしながら、貴殿はマニ教徒とみなされて教会会議によって断罪された者たち、あるいは貴族の権威の下にある聖職者たちによって惑わされてしまったことを知れ

皇帝がたは、正しい教えが光を放っている現状にしっぐく満足しておられるし、神と教会の正しい信仰に敵対するあらゆる異端者に関して「サウルの家は次第に衰えていき、ダビデの家はますます勢力を増していった」という言葉が、私どものあいだで、日ごとに実現されているのを看取することができるのである

(9)以上は兄弟から兄弟に向けた、私どもの勧告である